

# 永野小学校・学校だより(4月)

お天道様

校長 小泉 啓治

今から30年以上も昔、鹿児島にある開聞岳に登ったことがあります。標高は900mと少ししかないのですが、薩摩富士とも呼ばれる秀麗な山です。休日に登りましたが、2時間半くらい登りの間、ほとんど人に会いませんでした。この分ではだれもいないなと思いながら頂上に着いてみると、意外なことに一人のおばあさんがいました。しかも、どうも登山客ではなさそうです。話をしてみると麓に住んでいる方で、休日ごとにジュースなどを背負って登ってきて、登山客に売っているとのこと。他にだれもいない山頂で、いつの間にかおばあさんといろいろなおしゃべりをしていました。

「お天道様がみている。」

その時に言われた言葉です。私はきっと世の中のあり方について若気の至りで文句を言ったのでしょう。それに対して返ってきた言葉です。オテントウサマガミテイル。子どもころには祖父や祖母によく言われましたが、そのころはあまり聞かなくなっていました。それだけに大変印象に残りました。だれが見ていなくても、人はだませても、お天道様はみている。自分に恥ずかしくない生き方をしなさいとそのおばあさんは教えてくれたように思います。

先日久しぶりにこの「お天道様」という言葉に出会いました。以前にも学校だよりに書いた宮大工の小川三夫さんの本を読んでいた時です。(『不揃いの木を組む』より)

(前略)『一番わかりやすいのは仕口(しくち)とか継ぎ手のような木と木を組み合わせたところや。そんなところは継いでしまったら外からは全然見えないんだよ。そういうところは見えないけれど大事なんだ。うちはそういうところは丁寧にやらせるよ。そこを丁寧にしなさいというのは、きちっと組めということだ。

それは手間のかかることだ。そういうところはだれも見えていないよ。目に見えないとこだからかまわん、そうなってしまいうわけだな。それではいかんのや。

一所懸命やるというのは、二百年か三百年後に解体したとき、解体した大工さんが、ああ、こういう丁寧な仕事をしていたんだなと俺たち工人の顔を思い浮かべてくれる、そのときになったらわかってくれるだろう、とそういうことだ。(中略)

同時代の人の目にはどっちみち触れないわけやけども、俺たちの仕事は二百年後とか三百年後に、いづれわかるという気持ちや。そのことを昔の人は、お天道様が見ているといったんだ。見えないところをちゃんとするというのそういうことだな。』

平成20年度が始まりました。子どもたちが一人ひとり目当てをもって、生き生きと活動できる学校をつくっていくよう、教職員一同、心を一つにして頑張る所存です。『お天道様が見ていても恥ずかしくない』仕事をしたいと考えていますので、今までと同様のご理解とご支援をお願いいたします。